

# ピッポ新聞

2008

7

No.233

年間購読料(送料込み)1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL &amp; FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

## ピッポ

### 人には特徴をつかむ才能がある

動物の特徴は口にもっともよくでる、といわれます。動物とは、他の生きものを食べて生きる生きものですから、食べ方に応じて口が創られ、そこで口がキャラクターをもっともよくあらわす器官になるのでしょう。鳥なら、歯にかわる役割をはたしているくちばしに、よく特徴があらわれ、おかげで人はくちばしを見て鳥の種類を見分けることもできる、というわけです。

でも、くちばしの特徴で種類を見分けたい、と思うのは鳥の専門家でしょう。人は動物の特徴をつかんだら、つぎにふつつはどうするか。それは、ゾウを見て長い鼻が特徴だと思っただ人が次に何を考えるかを、想像してみれば分かります。長い鼻は何のためか、と思うのではないのでしょうか。つまり、長い鼻の意味を問います。ピアンキの『だれのくちばしがもつといいか』は、くちばしの特徴を紹介しながら、それにどんな意味があるかを問う物語になっています。

ピアンキの名作『くちばし』

二つの版の謎をとく

第二回

動物学者 今泉吉晴

このように、誰にもある生きものの特徴をとらえる才能(ゾウの長い鼻に注目する才能)、そして特徴の意味を問う好奇心は、人の本性でしょう。ピアンキには、この本性が子どもものくらしでは特に大切な働きをしている、という確信があった、と私は思います。

### なぜ二つの版は違うか

前回、私はシメがサクランボの実を割って種(たね)を食べる場面が、オリジナル版と簡略版で違つと、指摘しました。オリジナル版では、シメが「(種の)殻を簡単に噛み砕く」とあつて、すぐに「パチッ! ほら、われた」と続きました。この言葉はシメの強力なくちばしの意味を語る言葉です。

人はサクランボの果肉を食べて、種は捨てますが、シメは種の殻を割って、栄養価の高い仁(じん)を食べます。何とはっきりした好みの違いでしょう。その違いをしつかり伝える「パチッ! ほら、われた」が、簡略版にありません。なぜでしょうか。今回は「イスカの項」(第三節)から「ヨタカの項」(第七節)まで読み比べて、二つの版の性格の違いを考えます。

#### 第三節「イスカ」の項

### 進化の頂点に光をあてる

イスカはシメに近縁で、がっしりしたくちばしです。この節もオリジナル版と簡略版はほぼ同

じで、一つ大きな違いがあります。3でイスカが私のくちばしは複雑だ、「見てごらん」と自慢します。どう複雑なのか、オリジナル版では4で「くちばしが十字に交わっている」と説明して、特徴を読者に伝えます。

簡略版には、この文章がありません。読者はジユウジハシイスカという名から、特徴を知るので不要という判断かもしれませぬ。でも、説明があるオリジナル版は読者にあたたかい印象です。

イスカが松ぼつくりの鱗片をどうやってあけるかは、この物語の中でくちばしの働きの説明としてもっとも難しいところでしょう。著者は読者が自分で考えて理解してもらいたい、と考えて、そのために十字に交わる特徴に注意してもらおうとしたのでしょう。

松ぼつくりの開け方の説明は、どちらの版でも、7で「くちばしを松ぼつくりの鱗片にひっかけてぐいとあげると、種を取り出し」とあります。くちばしの特徴が頭に入っていれば、この説明でなんとか解けます。私は解けなかった場合には、以下のように自分の手の指をモデルにして理解してみてもどうか、と思っっています。

イスカの十字に交わるくちばしの働きは、手指をモデルにして理解できます。両手を合わせて指を交互に組んで握りながら、人差し指だけを立てて交差させます。交差させた人差し指は十字に交わり、イスカの「ジユウジハシ」のモデルです。

二本の人差し指を閉じると（他の指と同じように伏せると）、指の先は互いに離れます。つまり、くちばしを閉じると、くちばしの先は離れます（ひらきます）。

二本の人差し指をいくらか立てたところから、一方の指の先を何か小さなもの端にかけて、もう一方を別の何か大きなものにあてます。そのまま二本の指を閉じると指先はひらいて、小さなものが動くでしょう。小さなものが松ぼつくりの鱗片であり、大きなものが松ぼつくりの本体であれば、鱗片がひらきます（実際の場面では、イスカはふつう上のくちばしの先を鱗片にあてます）。

イスカが松ぼつくりから種子を取り出して食べる、という結果さえ分かればよい、と思う大人には、オリジナル版は冗長でしょう。そこで簡略版は説明を避け、結果や筋などの物語の骨組みを分かりやすくしている、とも考えられます。しかし、読み手を知らたくさせて肝心のことを書かないのは、水準をかってに決めて、それ以上は削る教科書のように、人をだめになります。自然はどんな問いにも答えてくれるのですから。

オリジナル版が重視しているのは、しっかりとした物語の骨組みに加えて具体性であり、生き生きとした親しみやすい口調も、具体性（自然を表現する直裁な力のある言葉）によっているでしょう。

ピアンキはシメとイスカという、強力なくちばしをもつ近縁の鳥を並べました。種を守る堅い殻や松ぼつくりを開けて食べる、

## 第二回分 オリジナル版 訳文

### 第三節「イスカ」の項

1 シメのはなしを ジユウジハシ イスカがきいて いました。

2 シメよ。 きみのくちばしは スズメとおなじ かんたんな なたちじゃないか。 すこし 大きくて ふとい だけだよ。

3 ほら わたしの ふくぎつな かたち の くちばしを 見てごらん。

4 上と下のくちばしが まじわって じゅうじになって いるでしょう。

5 わたしは このくちばしを うまく つかって 一年じゅう いつでも まつぼつくりから たねを ほじくりだせるんだ。

6 ほら こんなふうじ。

7 イスカは じゅうじになったくちばしを まつぼつくりの りんぺんに ひっかけて ぐいと あげると たねをと りだして 見せました。

8 なるほど とヒタキが いました。 きみの くちばしのほうが よく できているね。 (次ページの下段へ)

という課題が同じ仲間です。そこで、ヒタキは両者をくらべ、イスカに「君のくちばしの方がよくできている」といって、特殊化の進んだ種類をいいあてました(8)。でも、特殊化が進めば進むほどいいとは限りません。ヒアンキもイスカに「一年じゅういつでも、松ぼっくりの中から種をほじくり出せるんだ」といわせました(5)。読者は、松ぼっくりは一年中あるだろうか、と自問するでしょう。すると、他の食物にはイスカのくちばしは不便そう、と見えてきます。

#### 第四節「タシギ」の項

### 誰もが進化の頂点にある

この節は簡略版の3に！のマークがあるのが違うだけです。タシギは1で「くちばしとは・・・どんなものか分かっていませんね」と、問い直しを求めます。強力なくちばしをよしとする見方を変えたい思いです。「優れたくちばしは・・・長くなくてはいけない」と言います(2)。この言葉は、狩りをする場所にみあったくちばしがいい、と伝えていきます。ヒタキは「そのとおりだね」と率直に答え、シメらの頑丈なくちばしと、タシギの繊細なくちばしは比べられない、と認めます。

読者はこの節を読んで、湿地の草原で狩りをするタシギの動きを、映画を見るかの

ように思い描けます。1に「タシギのくぐもった声」とあり、タシギがくちばしを沼の泥に差し込んで、虫をさぐりながら鳴いたことを示唆しています。アシのしげみの中のごとで、タシギは見えています。そこで、タシギは泥からくちばしをひきだし、アシの間から突き出して「くちばしを見て」(3)と、声をかけました。タシギの動きを、目に見えるかのように伝えるヒアンキの文章はさすがです。このことは簡略版の本来の文章の水準をあらわしている、と思えます。

#### 第五節「きょうだいシギ」の項

### それでも魅惑の特殊化

さらに異論ができました。上にそつたり、下にそつたりするくちばしを持つ鳥の発言です。二つの版はほとんど同じで、3に小さな違いが二つあります。

一つは簡略版の3に「目を向けると・・・」と、あることで、その前の2でシギたちが「私たちのくちばしを見てないからよ！」と、いった言葉を受けた、ヒタキの動きを伝えていきます。オリジナル版にはありません。

もう一つも3で、くちばしの細さをあらわす形容の違いです。オリジナル版で「錐(きり)のように細く」に対して、簡略版は「編み棒のように細い」となっています。原稿が書かれた時代の違いかもしれませぬ。

#### 第四節「タシギ」の項

1ぬまの なかから ナガハシ タシギのくぐもった こえが きこえました。あなたたちは くちばしってものがほんとうは どんなものか わかっていませんね！

2すぐれた くちばしってものは ぬまのどろの なかを さぐって 小さなむしをつまみとれるように まっすぐに長くなくては いけないのだよ。

3わたしの くちばしを 見て「ごらん。4とりたちが したを 見ると アシのくさの あいだから えんぴつのように長くて マッチぼうのように ほそいくちばしが つきでて いました。

5ああ そのとおりだね。そんなくちばしが あつたら いいなあ！ とヒタキが いいました。

#### 第五節「ソリハシシギとダイシャクシギ」の項

1まつて！ と二わの きょうだいシギ……ソリハシシギとダイシャクシギ……が 声をあわせて ピーイピーイと ほそい声で なぎました。

2 タシギの くちばしが いいなんて わたしたちの くちばしを みてないからよ！

3 ヒタキの まえに 二つの すばらしい

ピアノキはこの節の1でシートンの手法を使い、読者に鳥の鳴き声を思い起こさせ、ついでその意味を伝えていきます。

私はこの作品を1954年に紹介した網野菊氏が「（ソリハシシギとダイシャクシギが）いつせいにキヤーキヤーいきました」と訳している（『だれのくちばしがすぐれているか？』、岩波少年文庫、『小ネズミのピーク』に収録）のを継承して、1のようにはしました。

二種類の鳥たちの特殊化したくちばしを見たヒタキは「あなたたちのくちばしよりいくちばしなんて、考えられない」と、いつてしまいます。ヒタキは再び特殊化のよさに魅了されました。

この物語で鳥がどれも素晴らしく描かれているのには、話の筋とは別の、物語の根っこに理由があるでしょう。ピアノキが、自然の中ですっかり鳥の種類ごとのよさを見て、書いていくのですから。くちばしを比べてこちらがいいと、いわせながら、鳥それぞれによさに惚れ込んでいます。それも当然、見た目のよさの賛美ではなく、くらしの成り立ち（自然界での食物の手に入れ方、つまり野生）の賞賛です。次の節がその頂点に思えます。

## 第六節 「ハシビロガモ」の項

### 瀟過摂食という驚き

特殊化なら私と、ハシビロガモです。「君は本物のくちばしを見たことがないん

だブウ」（1）、と、話し方まで一癖あります。「ブウ」としたのは、「O」という、特に意味はない語尾がつけてあるからです。それが、オリジナル版ではハシビロガモが話す三つの文章にあって、話し方のくせと分かります。

簡略版では一カ所だけで、何のことが分かります。この事実は、簡略版がオリジナル版を削ったものであることを示しています。

さて、簡略版のこの節にはもう一つ、オリジナル版を削ったためとしか考えられない大きな欠陥があります。1から6までは同じです。4と5で、自慢のくちばしをヒタキたちに笑われたハシビロガモは、名誉回復とばかりに6で頭を水に入れます。そして、オリジナル版の7から9は、ハシビロガモが水中の小さな生きものを瀟過して



— Да ты, видно, настоящих носов и не видел!—крякнул из лужи широконос.—Смотри, какие настоящие носы бывают: во-о!  
Все птицы так и прыснули со смеху прямо широконосу в нос:—Ну и лопапа!

P・ブーチキンの挿絵（1925年）  
簡略版のハシビロガモの節

くちばしが つきだされて いました。ひとつは上の ほうに もうひとつは 下のほうに まがつていて どちらも きりのように ほそく しかも ながいのでした。

4 上をむいた くちばしのシギがいました。わたしの くちばしは 水のなかの 生きものを ひっかけてとるために 上をむいているのだよ。

5 下をむいた くちばしのシギがいました。わたしの くちばしは 草むらから 小さな生きものを つまみとるために 下をむいているのだよ。

6 たしかに そのとおり。あなたたちの くちばしより いくちばしなんて かんがえられないね と ヒタキが いました。

## 第六節 「ハシビロガモ」の項

1 そうか。 きみはまだ ほんもののくちばしを 見たことがないんだなあブウと 水たまりの なかから ハシビロガモが なきました。

2 ほんもののくちばしが どんなものかブウ 見てごらんよ。

3 ほーら ブーウー！  
4 とりたちは ハシビロガモのくちばしにむかつて みな ふきだし わらいこころげました。

5 まるで シャベルじゃないか！  
6 でも このくちばしは 水を こすには

口中にためてみせる場面です。鳥たちも、読者も濾過摂食という特異な食べ物の手に入れた方がある、と知る驚きの場面です。

7から9が簡略版にあります。となる。と簡略版の6では、何を、何のために水に入れたのが、分かりません。7以降があつてはじめて、水に入れたのは頭と分かるのです（訳文ではオリジナル版と同じ訳文を入れてあります）。

### 濾過摂食のよさが伝わらない

網野菊氏は、この節の訳で苦労されたことが訳文からうかがえます。6をこう訳しました。

「これだと水をたいへん具合よくパシヤパシヤやれるんだ・・・ 大いそぎでふたたび水たまりの中へ、まつさかさまにでんぐり返しをうちました」（前出）。

前半が私の訳では「このくちばしは水をこすには便利なんだがなあブウ」、後半が「さつと頭を水に入れました」にあたります。

ここで注目すべきことは、網野氏はロシア人、ウルワラ・ブブノワ氏に相談していることで、彼女も理解できなかった、と考えられます。

さんというひと』コージエーヴニコワ著、1988年、群像社）。

網野氏の訳文のうち「でんぐり返しをうちました」とあるのは、「頭を水に入れた」と訳しては、何のため、という読者の疑問に答えられない、と判断したからでしょう。いずれにせよ7から9がないと、鳥たちがハシビロガモのくちばしのよさを分かった、とはなりません。

この物語に登場する鳥はみな優れ者に描かれているのであって、ヒタキもどの鳥がもつといいか、判断に困っています。実際、オリジナル版を読む読者は、まるで髭クジラのような鳥ではないかと、興奮するでしょう。ところが、簡略版の読者は、おかしな形のくちばしがあるものだ、と思うだけで終わるでしょう。シャベルのようというて笑う鳥たちを、賞賛する鳥たちにかえる7から9の文章は不可欠です。もともと原稿になかったとは考えにくいことです。

### 第七節「ヨタカ」の項

#### くちばしが喉になる!?

ヨタカが遠慮がちに発言したのは、多数の獲物を捕らえる話なら自分がでない訳にはいかない、と思つたからでしょう。オリジナル版ではヨタカは、2で「ぼくのくちばしは・・・ とてもいい」といい、3でその理由を説明します。この説明に野生の雰囲気を与えているのが「群れごと捕らえる」という表現でしょう。夜空を群飛

べんりなんだがなあブウ！ とハシビロガモは いじけて いいました。そして さつと 頭を 水に いれました。

7 ハシビロガモは くちばしいっぱいに水を いれると 頭を あげて 水をこしてみせました。

8 まるで くしのような ぎざぎざが くちばしの ふちにあつて そこから 水を こぼしだしたのです。

9 すると 水のなかの 小さな 生きものが ぜんぶ 口のなかに たまりました。

### 第七節「ヨタカ」の項

1 ぼくの くちばしも 見て くださいと 木のうえから アミハシ ヨタカが 小さな声でキョキョツと えんりよがちにいいました。

2 ぼくの くちばしは 小さいけど とてもいいよ。

3 よる じめんの ちかくを くちばしをあけて くちのまわりの ひげを あみのように ひろげて とぶとね。

4 どうやったら そんな すごいことができるの？ と ヒタキが おどろいて ききかえました。

5 ヨタカが こつするのだよ といったかと おもつと ぱつと 大きく 口をあけました。

エヴェニー・ラチヨフの挿絵（1960年） オリジナル版のヨタカの節



— Обратите внимание на мой носик, — прошептал с дерева скромный серенький козодой-сетконос. — У меня он крохотный, однако замечательный: мошкара, комары, бабочки целыми толпами в глотку мою попадают, когда я ночью над землей летаю, разинув рот и сеткой распорю их усы.  
— Это как же так? — удивился мухолов.  
— А вот как, — сказал козодой-сетконос.  
Да как разинет пасть — все птицы так и шархнулись от него.  
— Вот счастливец! — сказал мухолов. — Я по одной мошке хватаю, а он ловит их сразу стаями!  
— Да, — согласились птицы, — с такой пастью не пропадёшь.

する虫たちとの遭遇を想像して、わくわくします。

簡略版では、2で「私のくちばしは……網と喉の役目を」とあります。オリジナル版の「とてもいい」がなく、代わりに「網と喉の役目」はオリジナル版の3の前半部分の要約かもしれませんが、意味が分かりません。それに「髭をひろげると網になる」がなく、口をあけたまま飛ぶとも書いてないので、ヨタカの狩りの仕方の基本がわかりません。

私は、「網と喉の役目」のうちの「網の役目」の方は髭のことと理解したものの、「喉の役目」の意味はなかなか分かりませんでした。また3に「網の喉」とあり、同じく難問でした。ちなみにオリジナル版にも、3に「群れごと喉に入る」とあります

が、口の奥の本来の喉です。

「喉の役目」とか「網の喉」とは、どういう意味でしょうか？ この言葉の解釈には、オリジナル版を見ないで簡略版の翻訳にあたったと思われる網野氏の訳が参考になりました。

網野氏はこう訳しています。

「わたしのくちばしは……ふる  
いの役もすれば、のどの役もするのです。……（小虫が）一群れごと、ふるいののどの中に落ちこむんですよ……」

訳文は、網を「ふるい」としているのを別にして、私の訳と基本は同じで、はるかに読みやすい訳です（私は簡略版を絵本に訳したいとは思わないので、表現の工夫はしていません。オリジナル版についても、今の段階ではそれとあまりかわりません。

前の回にロシア人との共訳を目指すとききましたが、それは絵本にする段階での共意の意味です。ここでは、私の関心事が中心であることから、私の理解で書いています。名をあげないことには他にも理由があり、時期がきたら説明します）。

とはいえ、くちばしがなぜふるい（網）になり喉になるのかは、やはり推測しようがありません。そこで、ヒタキが問い返す言葉が生きます。

「それはまた、どうしてですか？」（前

6 鳥たちが みな にげるようにしてはなれました。ヒタキはなんて しあわせな やつなんだ とつぶやき つづけて とういいました。

7 わたしが 「びきずつ むしを とつている」というのに ヨタカは いっぺんにむれごと つかまえるとは。

8 まったく そのとおりと ほかのとりたちも うなずきました。 そんなくちばしなら おなかですいて こまるなんてことは けっしてないでしょう。

第二回分 簡略版 訳文  
『だれの くちばしが もっと いいか』

### 第三節「イスカ」の項

1 シメのはなしを ジュウジハシ イスカがきいて いいました。

2 シメよ。 きみの くちばしは スズメとおなじ かんたんな かたちじゃないか。 すこし 大きくて ふとい だけだよ。

3 ほら わたしの ふくざつな かたちのくちばしを 見てごらん！

4 わたしは このくちばしを うまく

つかって 一年じゅう いつでも まつぶつくりから たねを ほじくりだせるんだ。

6 ほら こんなふうだ。

7 イスカは じゅっじになったくちばしを まつぶつくりの りんぺんに ひっ

出) ヨタカは口を大きくあけてみせます。ヨタカのくちばしは小さくても大きな頭のほとんどは口です。ヒタキたちは、口を見ずべてを理解しました。読者も口に秘密がある、と想像できます。簡略版の言葉の意味と文脈を見事に与えた訳です。

先に私は網野氏の誤訳を指摘しました。その訳文から説明不足の原文についてできるかぎりの吟味をしたと分かります。そこで、「ふるいの役もすれば、のどの役もする」についても十分な吟味がなされている、と信じる事ができます。

そこで、私も「喉の役目」と「網の喉」とは何か、考えてみました。かなりの月日を要しましたが、結論は簡単です。

### 漏斗をモデルにする

私は漏斗をモデルにしてみました。漏斗とは大きな容器から小瓶などに水や油を移すのに使う道具です(写真)。円錐型の受け口に「足」と呼ばれるチューブがついています。



漏斗(じょうご)  
円錐型の受け口と「足」

ヨタカの口の回りの髭、つまり網を円錐型の受け口とみなし、くちばしを足とみただてます。口をあけて夜空を飛ぶヨタカの髭、つまり受け口にかかると虫は流れる

ように「足」であるくちばしに運ばれたくさんの虫が集まって口に入るでしょう。受け口が「足」に移るくびれ、つまり髭からくちばしに移るところを喉とみなせば「くちばしが喉になる」が理解できます。「網の喉」も分かります。

漏斗のモデルで想像できる、多数の小さな虫が一所に集められて口に入る(あるいは喉に入る)、という理解は大切です。小さすぎる食物片は口の中でうまくあつかえず、飲みこむのも難しいからです。そこで、私たちが食べるご飯の米粒と同じように塊であつかえばよく、その塊のものと「群れごと」という言葉は、夜空を群飛する虫とつながって深い表現です。

この節の残りの文章はほとんど同じで、ヨタカの狩りの技をヒタキと仲間たちが絶賛します。7に一つ違いがあります。オリジナル版で「群れごと捕まえる」とあるのが、簡略版では「何百匹も捕まえる」となっています。ここでいう何百とは、数十ではなく百の桁のことです。

この言葉は、3のヨタカという言葉「群れごと網の喉に入る」を聞いたヒタキの感想で、なぜ数が分かるのか、理屈がありません。簡略版には数であらわしたい、という考えがあることになり、しかし、ここで使ったら文脈と合わないことが分かっていません。それに数への換算も虫の大きさによるばらつきへの配慮がなく、非現実的です。さて、この節は1から8まで、話しの筋

かけぐいっと あげると たねをとりだして 見せました。  
8 なるほど ヒタキがいました。きみの くちばしのほうが よく できているね!

### 第四節「タシギ」の項

- 1 ぬまの なかから ナガハシ タシギの くぐもった こえが きこえました。あなたがたは くちばしとは ほんとうは どんなものか わかって いませんね!
- 2 すぐれた くちばしは ぬまのどろの なかを さぐって 小さなむしを つまみとれるように まっすぐに 長くなくては いけないのだよ。
- 3 わたしの くちばしを 見て ごらん!
- 4 とりたちが したを 見ると アシのくさの あいだから えんぴつのように長くて マッチぼうのように ほそいくちばしが つきでて いました。
- 5 ああ そのとおりだね。そんなくちばしが あったら いいなあ! と ヒタキが いいました。

### 第五節「ソリハシシギとダイシャクシギ」の項

- 1 まって! と二わの きょうだいシギ……ソリハシシギとダイシャクシギ……が 声をあわせて ピーピーイ と ほそい声で なきました。

はほとんど変わらないのに、2から4が少し違っていて、簡略版では肝心のヨタカの虫の捕らえ方が分かりません。そのため、ヨタカの狩りをヒタキたちが絶賛しても印象は薄く、全体が散漫です。7の群れの数の換算といい、ビアンキとは別の人がしたことではないか、と思えてきます。

以上で今回の読み比べは終わりました。

これで前回の二節をふくめて七節を見たことになりました。残るは三節で、ペリカンの節、キツツキの節と続き、最後はヒタキがであった鳥たち全員を並べて、「より良いくちばしの中の」そのまた「より良いくちばし」を選ぶ節です。それら三節も読むでからの方がいいのですが、二つの版の違いの傾向はつかめました。次回は物語の内容について検討するつもりですので、ここでは、オリジナル版と簡略版の関係を考えたいと思います。

### 一三三の言葉の違いが 大きな欠陥をつくる

違いがあつたのは主に、くちばしの特徴と働きの説明の文章でした。ヒタキ、シメ、イスカ、ハシビロガモ、ヨタカで、この種の違いがありました。それも一三三の言葉の違いとか省略でした。決定的な意味をもつ特徴と働きの説明の言葉であつたために、あるいはそれらが欠落したために影響が大きくなったのです。

それに、簡略版のハシビロガモの節では、

オリジナル版にある二三行の文章の欠落があり、それもくちばしの働きの説明でした。そのためハシビロガモのくちばしのよさに触れずに終わるといふ、あり得ない展開でした。

ヨタカの節では、簡略版の狩りの仕方の説明の用語が難解で飛ばし読みするしかなく、節の全体が印象の薄いものになっていました。その他、簡略版では、オリジナル版と違うところがことごとく作品の質を落としていました。

しかもその程度は、具体性が失われたり、意味がとれなかったり、あるいは文脈にそぐわなかったり、それに、ハシビロガモでは物語の構成を揺るがしたりと、極端です。

### 誤訳は出版社の責任でしょうか？

簡略版は、ビアンキの原稿を理解できない誰かが手を入れた、と考える他ないでしょう。本作りにかかわる編集者、校閲者、あるいは検閲者が誰かでしょう。

これら編集者らが原稿を訂正するのは通常のこと、返された原稿を著者が読み返して不適切な訂正であれば、もとにもどします（編集者による訂正があまりに多い場合には、著者がもとに戻すための訂正、編集者の訂正の趣旨に合わせて文章を整えるための訂正と原稿はさまざまに訂正で混乱します。そこで著者は文章の全体を再吟味して原稿を書き直しますから、著者の原稿といつてもいくつもバージョンができます）。

それも、革命直後のとてつもない混乱期

2 タシギの くちばしが いいなんて わたしたちの くちばしを みてないからよ！

3 ヒタキが目を向けると すぐちかくに二つの すばらしい くちばしが ありました。 ひとつは上のほうに うひとつは 下のほうに まがついて どちらも あみぼう のように ほそく しかも ながいのでした。

4 上をむいたくちばしのシギがいました。 わたしの くちばしは 水のなかの 生きものを ひっかけてとるために 上をむいているのだよ。

5 下をむいたくちばしのシギがいました。 わたしの くちばしは 草むらから小さなむしや ミミズを つまみとるために 下をむいているのだよ。

6 たしかに そのとおり。 あなたたちの くちばしより いくちばしなんて かんがえられないね！ と ヒタキが いいました。

### 第六節「ハシビロガモ」の項

1 そうか。 きみは ほんもののくちばしを まだ見たことがないんだ と水たまりのなかから ハシビロガモが なきました。

2 ほんもののくちばしが どんなものか 見てごらん。

3 ほうら フォーウー！

4 とりたちは ハシビロガモのくちばしに むかって みな ふきだし わらいころ

のことであり、著者が再チェックするところではなかつたかもしれせん。あるいは法律的な強制力をもつ検閲制度のもとでの訂正で、もとに戻すことが許されなかつたかもしれせん。あるいは、著者にとつては最初の出版で、不満のある訂正も受け入れ、世にだすことを優先したのかもしれない。

奇しくも、福音館書店書籍編集部は、私が指摘した田中友子氏の訳による『おしゃべりなもり』と『くちばし』どれが一番りっぱ？』の訳文の中のおおくの誤訳のうち、それぞれ一点について「翻訳者が元々正確に訳していた訳文を現在のように変えていたのだという経緯があります」とのべて、訳者ではなく出版社の責任と書いています（前出）。

私は、原稿に意見を述べるのは編集者の仕事であるのに、誤訳まで編集者の責任とした文書を見たことがなく、厳しい交渉が訳者と福音館書店との間にあつたと推測します。

それに、旧ソ連にあつたかもしれない、と推測したことが、足下に実例まであつたとは驚きです。

なぜ福音館書店の編集者に動物の種名を変える必要があつたのか、なぜ二点に限られるのか（「見解」は限られるとはいってないので、特に田中友子氏の反論からはぶかれた『おしゃべりなもり』にはまだあるでしょう）、また、「正確な訳」を誤訳にさせられて訳者はどうしたのか、は書かれていません。さらに、私に指摘されるま

で田中友子氏がだまつていた理由は何でしょう。読者に目が向いていません。

編集者の無理強いがあつたというなら（私の問い合わせに書籍編集部長はその意味のことをいわれました）、パワーハラスメントでしょう。読者に説明する責任が福音館書店と訳者の双方にあります。

### 肝心なのは優れた文学作品であることの確認

ロシアでは、今日、簡略版の方がおおく刊行されている、ということなのです。このことを福音館書店書籍編集部長は、ピアンキの版權継承者の意向にも言及しながら、簡略版の方が読者に歓迎されている、という意味のことを述べて、簡略版を採用した理由にしています（前出）。しかし、足下に実例があるほどで、一度刊行された本は誤りがあつても刊行され続けるのであつて、読者に選択の自由はないのです。

私が田中友子氏の絵本の批評を書いたきつかけは、トガリネズミがモグラを捕まえて食べる、という『おしゃべりなもり』の信じがたい記述にありました（この件については、かつて私の友人が福音館書店に問い合わせしており、担当編集者と話をしています。「出版社の責任」という書籍編集部長の「見解」とはくい違つ説明を受けており、日本語訳を検討する際に改めてとりあげます）。

原本と照らし合わせてみるとモグラはネズミの誤訳で、もっと重大ないくつもの誤

ました。  
5 まるで シャベルじゃないか！  
6 でも このくちばしは 水を こすには べんりなんだがなあブウ！ と  
ハシビロガモは いじけて いいました。  
そして さつと 頭を 水に いれま  
した。

### 第七節「ヨタカ」の項

1 ぼくの くちばしも 見て ください  
と 木のうえから アミハシ ヨタカが  
小さな声でキョキョツと えんりよがち  
にいいました。  
2 ぼくのくちばしは 小さいけれど あ  
みと のどの やくめをしてくれます。  
3 よる じめんの ちあくを とぶと  
いろいな虫や カヤ ガが むれごと  
あみの のどに はいるのです。  
4 ヒタキが おどろいて どうやったら  
そんな すごいことが できるの？ と  
ききかえました。  
5 ヨタカが こうするのだよ といったか  
と おもつと ぱつと 口を 大きく  
あけました。  
6 鳥たちは みな にげるようにして  
はなれました。ヒタキは なんと  
ヒタキは なんとという しあわせものだ  
とつぶやき つづけて こう いいま

りがみつかったのです(『ネバーランド』8巻、2007年2月)。しかし、田中友子氏は理由にならない理由をのべて『おしゃべりなもり』にふれませんでした。そこで今回は、誤訳にとどまらず作品の質を問題にしています。

次回は残りの三つの節を読み、どちらの版をビアンキの作品と見るのが適切かをかながえてます。オリジナル版のよさを再評価することになるでしょうが、原作が優れた文学作品であることの確認が今ほど求められている時はありません。

(続く)

した。

7わたしが 1ぴきずつ むしを とつて いるというのに ヨタカは いっぺんに 何百ぴきも つかまえるとは・

8 まったく そのとおり と ほかのとりたちも うなずきました。 そんな口なら おながが すいて こまるなんてことは けっしてないでしょう。

(続く)

## ねえ、この本読んだ？



『うみのいえのなつやすみ』(青山友美・作 1050円 偕成社) 夏休み、なつちゃんは

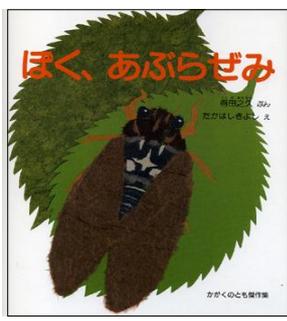
お母さんと親戚のやっている海の家にやってきました。そこは楽しいことがいっぱいです……。



『すみれおばあちゃんのひみつ』(植垣歩子・作 1050円 偕成社)

すみれおばあちゃんはずっとも縫い物じょうずです。それに親切です。

頼まれるとカエルのベツトを縫ってあげたり、チョウの羽根を縫ったり……。とうとう糸がなくなってしまうました。でもね……。



『ぼく、あぶらぜみ』(得田之久・文 たかはしきよし・絵 880円 福音館書店)

茶色の羽根をしたアブラゼミは、夏になると地面から出てきて一週間位で死んでしまいます。その間に結婚し子孫を残す

だつて。しかもね地面の中では4年もすごすんだつてよ。アブラゼミの一生を描いた絵本。



『うみべであそぼ』(なかのひろみ・文 小林安雅・写真 945円 福音館書店)

海岸の潮だまりや磯には、いろいろな生き物がいるんだね。軟体動物なんかは、ちょっと気持ち悪いよね。この夏、キミはどんな生き物と海で出会えるかな？

『今森光彦・ネイチャーフォト・ギャラリー』(今森光彦・文・写真 1890円 偕成社)



著者が世界中を旅して、撮った写真の中から二十二点を選んで一冊の本にした。こんな見ると、絶対に地球の自然は大切にして未来へつなげたよね！

## 編集後記

今泉さんの「『くちばし』二つの版の謎をとく」ますますおもしろくなってきた。原書の解説をしながら、翻訳し、かつ先訳の批判を展開していくというのは、もしかしたら、こういうのは初めてかもしれない。動物学者今泉さんの、ビアンキ作品の読みの深さに脱帽！